

## 王さんとのえにし

山 口 雄 輔

わたしが、王文超さんの保証人を依頼されたのは、1990年（平成2年）の春のことでした。彼は、北京から画学生として、来日したのですが、何よりもまず日本で生活するための言葉を勉強する必要があって、文教大学の言語文化研究所に入学したのです。わたしの家に見えたときは、まだたどたどしい日本語で、ちょっと話が複雑になると、紙に書いたりしなければ通じないこともありました。人柄は、たいへん誠実で、真面目な印象を受けましたが、芸術に対する鋭い感覚の持ち主であることを感じさせる精神力の強さも持ち合わせているように思いました。

その後、会うたびに日本語は上手になり、話が芸術の方面になると時のたつのを忘れるくらいに熱中し、頬を紅潮させて帰って行ったものでした。

秋に奥さんと呼び寄せていっしょに暮らすようになりました。奥さんの名は立辰さんといって、清王朝の末裔とか、世が世なら王女さまになったかも知れず、色白で豊かな長い黒髪を持ち主の美人でした。王さんと同じ画学生なのですが、立辰さんの方は、グラフィックデザイナーを目指していました。中国ではすでに大学院を卒業したエリートでした。ところが、日本へきてから、経歴を生かせるよいアルバイトが見つからずに、何と、パチンコ屋さんの自転車置き場の番人をしているとのことでした。

王君は翌91年（平成3年）春に、めでたく文化研究所を卒業し、4月から多摩美術大学の研究生になることができました。わたくしの保証人としての役目は、初め1年の約束でしたから、これで終わったわけなのですが、

兩人からのたつての希望で、王君の保証人を引き継ぎ、更に立辰さんの保証人をも引き受けることになりました。立辰さんのアルバイトも、コンピューターグラフィックデザインの口を見つけ、自分の天職と通じる仕事なので、大変はりきって精出すようになったと言ってきました。立辰さんの日本語の進歩は素晴らしく、初めて拙宅に、ペアでお見えになったときは、王さんが通訳のようにしていたのに、いつのまにか、王さんの方は笑顔でうなずくだけで、もっぱら奥さんの立辰さんの方が雄弁に語るように変わって行きました。そして、彼女の念願かなって、今年の4月から武蔵野美術大学の大学院へ入学許可になったということです。

昨年（1992年）の正月にお二人を軽井沢の山荘に招いたところ、中国料理の香辛料をいろいろと持ってきて、家内といっしょに、不足の材料の買い物をして、すっかり手はずをととのえ、本場の中国料理をわたしたちの目の前で作ってくれました。二人とも台所に立ちっぱなしで、次から次へと匂いのよい色鮮やかな料理を出してくるのに家中の者が全く驚かされました。

又夏休みには、浅間山の見えるテニスコートで、家族テニスを楽しみました。王君たち夫婦と、わたしたち夫婦がお互いに組んで混合ダブルスの試合をしました。勝ち負けを超えて笑い声の絶えない楽しいゲームになりました。王女であるはずの立辰さんも、アメリカ人顔負けの大声ではしゃぐ姿が見られました。フランスの詩人ボードレールの言葉ではありませんが、

さらば夏の光よ

と、とどめてもとどまらない短い夏はあっという間に過ぎて行きましたが、思い出は国を超えたお互いの心の中に一生消えることがないでしょう。

王君は、大変な勉強家・努力家で、1992年（平成3年）の5月には、何

と、個展を開きました。場所は駒込の「絵の華」というギャラリーで、25点の大小の作品を並べました。画の関係者や友人が大勢集まり、わたしは、主賓として挨拶をさせられました。王君の美しい中国画展がこうして、日本で開かれることへの驚きと喜びを述べ、王君の才能と努力が、わずか2年の間に決して楽とは言えない異国の生活の中で成し遂げられたことへの畏敬の念を心をこめて申し述べました。そして、王君の画業が、日中交流の虹の懸け橋になるように祈ると結びましたら、熱い拍手をいただきました。

縁（えにし）あつて、王君たちとお逢いし、日中交流という大きな流れの中で、雨粒に過ぎませんが、多少なりともお役に立つことができ感謝しています。

最後に、わたしの恩師金田一京助先生が、昭和32年の宮中歌会初めに、めしうど召人として参列されたときの御歌を披露させていただいて、この拙文をとじたいと思います。

道のべに 咲くやこの花 花にだに  
えにしなくして わが逢ふべしや